英雄の器

芥川龍之介

「何しろ項羽と云う男は、英雄の器じゃないですな。」

漢の大将呂馬通は、ただでさえ長い顔を、一層長くしながら、疎な髭を撫でて、こう云った。彼の顔のまわりには、十人あまりの顔が、皆まん中に置いた燈火の光をうけて、赤く幕営の夜の中にうき上っている。その顔がまた、どれもいつになく微笑を浮べているのは、西楚の覇王の首をあげた今日の勝戦の喜びが、まだ消えずにいるからであろう。——

「そうかね。」

鼻の高い、眼光の鋭い顔が一つ、これはやや皮肉な微笑を唇頭に漂わせながら、じっと呂馬通の眉の間を

見ながら、こう云った。呂馬通は何故（なぜ）か、いささか狼狽（ろうばい）したらしい。

「それは強いことは強いです。何しろ塗山（とざん）の禹王廟（うおうびょう）にある石の鼎（かなえ）さえ枉（ま）げると云うのですからな。現に今日の戦（いくさ）でもです。私（わたし）は一時命はないものだと思いました。李佐（りさ）が殺される、王恒（おうこう）が殺される。その勢いと云ったら、ありません。それは実際、強いことは強いですな。」

「ははあ。」

相手の顔は依然として微笑しながら、鷹揚（おうよう）に頷（うなず）いた。

幕営の外はしんとしている。遠くで二三度、角（かく）の音が

したほかは、馬の嘶（いなな）く声さえ聞えない。その中で、どことなく、枯れた木の葉の匂（におい）がする。

「しかしです。」呂馬通は一同の顔を見廻して、さも「しかし」らしく、眼（ま）ばたきを一つした。

「しかし、英雄の器（うつわ）じゃありません。その証拠は、やはり今日の戦ですな。烏江（うこう）に追いつめられた時の楚の軍は、たった二十八騎です。雲霞（うんか）のような味方の大軍に対して、戦った所が、仕方はありません。それに、烏江の亭長（ていちょう）は、わざわざ迎えに出て、江東（こうとう）へ舟で渡そうと云ったそうですな。もし項羽（こうう）に英雄の器があれば、垢を含んでも、烏江を渡るです。そうして捲土重来（けんどちょうらい）す

るです。面目（めんもく）なぞをかまっている場合じゃありません。」

「すると、英雄の器と云うのは、勘定に明いと云う事かね。」

この語（ことば）につれて、一同の口からは、静な笑い声が上った。が、呂馬通は、存外ひるまない。彼は髯から手を放すと、やや反（そ）り身になって、鼻の高い、眼光の鋭い顔を時々ちらりと眺めながら、勢いよく手真似（てまね）をして、しゃべり出した。

「いやそう云うつもりじゃないです。――項羽はですな。項羽は、今日戦（いくさ）の始まる前に、二十八人の部下の

前で『項羽を亡すものは天だ。人力の不足ではない。その証拠には、これだけの軍勢で、必ず漢の軍を三度（さんど）破って見せる』と云ったそうです。そうして、実際三度どころか、九度（くたび）も戦って勝っているです。私に云わせると、それが卑怯（ひきょう）だと思うのですな、自分の失敗を天にかずける——天こそいい迷惑です。それも烏江（うこう）を渡って、江東の健児を糾合（きゅうごう）して、再び中原（ちゅうげん）の鹿を争った後でなら、仕方がないですよ。が、そうじゃない。立派に生きられる所を、死んでいるです。私が項羽を英雄の器でないとするのは、勘定に暗かったからばかりではないです。一切を天命でごまかそうとする——

それがいかんですな。英雄と云うものは、そんなものじゃないと思うです。蕭丞相（しょうじょうしょう）のような学者は、どう云われるか知らんですが。」

　呂馬通は、得意そうに左右を顧みながら、しばらく口をとざした。彼の論議が、もっともだと思われたのであろう。一同は互に軽い頷きを交しながら、満足そうに黙っている。すると、その中で、鼻の高い顔だけが、思いがけなく、一種の感動を、眼の中に現した。黒い瞳が、熱を持ったように、かがやいて来たのである。

「そうかね。項羽はそんな事を云ったかね。」

「云ったそうです。」
呂馬通は、長い顔を上下に、大きく動かした。
「弱いじゃないですか。いや、少くとも男らしくないじゃないですか。英雄と云うものは、天と戦うものだろうと思うですが。」
「そうさ。」
「天命を知っても尚、戦うものだろうと思うですが。」
「そうさ。」
「すると項羽は――」
劉邦（りゅうほう）は鋭い眼光をあげて、じっと秋をまたたいている燈火（ともしび）の光を見た。そうして、半ば独り言のように、

徐(おもむろ)にこう答えた。
「だから、英雄の器だったのさ。」

底本：「芥川龍之介全集２」ちくま文庫、筑摩書房
　　　１９８６（昭和61）年10月28日第１刷発行
　　　１９９６（平成８）年７月15日第11刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月７日公開
２００４年３月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。